

## 外国人児童を対象とするインクルーシブ教育の可能性

### —小学校の日本語教室と在籍学級の参与観察を通して—

藤田美桜・齋藤ひろみ（東京学芸大学 学部生・教員）

#### 1. 研究の背景と目的

国内の学校現場では、外国人児童生徒が増加し、日本語指導などの特別な支援が必要となっている。しかし、教員の加配がなく取り出しの支援等の体制が整わない学校では、在籍学級でかれらの学習保障のための支援を行うことが不可欠となる。その実施には「すべての学習者の個別性に着目して対応し、誰も排除しないでともに学べる場を提供しなければならない」(Unkel, Monika 2018)とするインクルーシブ教育の考え方が参考になる。UNESCO(2005:13)では、インクルージョンは、学習、文化およびコミュニティへの参加を促進しつつ、教育における排除と教育からの排除を軽減することにより、全ての学習者の多様なニーズに合わせて、対応していくプロセスであるとされる。外国人児童生徒の場合は、背景の言語・文化、母国での経験等の個別性に応じて、「不適応」「日本語の不十分さ」等への合理的配慮に基づく支援が求められる。

本研究では、外国人児童を対象とする日本語教育の実践事例の分析と、外国人児童が在籍する小学校の在籍学級及び日本語学級での参与観察を通して外国人児童のために実施されている合理的配慮にもとづく支援を記述・分析する。その結果をもとに、在籍学級を外国人児童が排除されずに、誰もがともに学べる場とするために、インクルーシブ教育がもつ可能性について検討する。

#### 2. 研究方法

##### ①学校で実施された外国人児童対象の日本語教育の実践例の分析

実践例(山中 2009 等)を、どのような合理的配慮による支援があり、学習への参加をどのように促していたかを分析した。「物理的配慮・学習内容に関わる配慮・教師等の働きかけ」があり、それを受け、児童には「学習への積極性・意欲・周囲の児童とのかかわり・日本語の学習」という効果があった。この合理的配慮のタイプと効果を観察記録の分析観点とした。

##### ②参与観察の記録の分析と教師へのインタビュー

フィールドは東京近郊の外国人児童が7人在籍する小学校である。担当教員1名の配置があり、週に数回取り出しの日本語指導が行われている。在籍学級と取り出しの日本語教室で、合計13回計52時間の参与観察を行った。対象の児童は、日常会話には問題がないが在籍学級での教科学習には困難を抱えていた(詳細は発表時)。教員・周囲の子どもたちからの対象児童への支援・補助をフィールドノートに記録し、それをエピソード化して分析を行った。また、日本語指導担当教員に子どもの困難、配慮していること、在籍学級で必要な支援についてインタビューを行った。

#### 3. 分析結果

見られた合理的配慮にもとづく支援のエピソード数を表1に示す。以下、具体例を挙げる。

##### 3.1 物理的な配慮による支援①

漢字クイズの活動で、口頭の説明だけでは理解が難しい1年生のB児も、黒板に掲示してある模

表1 観察された合理的配慮にもとづく支援

合理的配慮のタイプ	在籍学級	日本語教室
A 物理的な配慮	5	9
B 学習内容に関わる配慮	5	7
C 教師の働きかけ	8	12

造紙のセリフを何度も見返しながらクイズを理解し、応えていた（支援に下線）。

### 3.2 学習内容にかかわる配慮②

教師が既習の単位について問いかけ、新しい単位の言い方を予測させ、理由を尋ねてたことで、E児は蓄積してきた知識を想起し、応用して考えている。この日本語学級での学んだことは、在籍学級での学習においても働くと考えられる。

### 3.3 教師の働きかけ③

急下降する折れ線グラフを見て D は「やばい」と言う。教師は社会科にふさわしいことばを探させる。D が「どんどん下がった」と言い直すと、更に「何が？」と問い、児童の応答はつなぎ合わされ文として整えられた。

## 4. 考察

日本語教室では、「学習内容に関わる配慮」に基づく支援が多く見られ、「ことばの学習」の面で子どもの学びは大きかった。児童の「その後」を見据えて在籍学級での学びにつなぐ支援が効果を上げていると考えられる。一方、在籍学級では「教師等の働きかけ」による支援が見られ、効果は「周囲の児童とのかかわりをもって学習参加する」面にあった。この結果から、子どもが在籍学級で学習参加する上で、直面する困難を予測し、物理的・学習内容に関わる配慮をし、躓きに応じてその場で働きかけることによって「教育からの排除を軽減すること」ができ、それによって「学習コミュニティへの参加」が促され、在籍学級で外国人児童を包摂する教育が可能になると考えられる。外国人児童生徒が在籍学級という同じ空間で「ともに学ぶ」インクルーシブ教育の実現には、前後の取り出しの指導で、個の躓きに応じて「ことば」と「学び方」を経験的に獲得させることと、在籍学級において児童の状況に応じて積極的に関係づくりを働きかけることの両方が必要であることが示唆される。

### 【引用文献】

UNESCO(2005) Guidelines for Inclusion (最終閲覧：2019年12月14日)

[http://www.ibe.unesco.org/sites/default/files/Guidelines\\_for\\_Inclusion\\_UNESCO\\_2006.pdf](http://www.ibe.unesco.org/sites/default/files/Guidelines_for_Inclusion_UNESCO_2006.pdf)

Unkel,Monika(2018)「日本語教育の多様性を再考する：インクルーシブ教育の観点から」

『外国語教育のフロンティア』大阪大学大学院言語文化研究科、pp.171-185

山中文枝(2009)「体験・探求・発信する授業－授業『赤ちゃんのふしぎ』の取り組みを通して」

齋藤ひろみ・佐藤群衛編『文化間移動をする子どもたちの学び』ひつじ書房、pp.55-85

### ①1年生B児 在籍学級 国語科

担任は漢字クイズ活動で「これから問題を出します」「あたりです」等をセリフにして模造紙に2色で書き分け、黒板に貼り、ルール説明、クイズ活動を行っていた。

### ②5年生E児 日本語教室 算数科

T: これ(1cm<sup>3</sup>の図を指さして)は何ていう?

E: 1立方センチメートル。

T: じゃあこれ(1m<sup>3</sup>の図を指さして)はEさんだったらなんと名付けますか?

E: …… 1立方メートル。

T: ピンポン。なんでこう思ったの?

E: センチメートルのセンチを抜けて1立方メートル。

### ③5年生D児 日本語教室 社会科

遠洋漁業の収穫量のグラフ資料を見ながら

T: このグラフを見て気付くことを言えますか? 遠洋漁業はどうなっている?

D: なんか…やばい。

T: そうね、「やばい」って便利な言葉ですよ。ね。「やばい」じゃない言葉で言える?

D: どんどん下がった。

T: 何が?

D: とれる魚の量が。

T: そうだよ、年々漁獲量が下がってきてますよね。